



Osaka Gakuin University Repository

Title	“Miriam” 研究 — 「影」 としての Miriam の役割 A Study of “Miriam” — Miriam’s Role As a “Shadow”
Author(s)	山口 修 (Osamu Yamaguchi)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 69 号 : 1-17
Issue Date	2015.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

“Miriam” 研究 — 「影」としての Miriam の役割

山 口 修

序

Truman Capote の短篇 “Miriam” (1945) の Mrs. Miller について、Helen S. Garson は、“[Critics] share the views that Mrs. Miller is a woman who finds her life intolerable, and who therefore creates another self, a person she simultaneously longs to be and rejects. She is destroyed by the revelation and can escape it only through madness” (Garson 1992, 13) と指摘する。¹ 確かに、Mrs. Miller が Miriam を創り出したのは間違いない。だが、Mrs. Miller は、本当に自分が創造した Miriam によって狂気に導かれ、壊されてしまうのだろうか。Miriam は否定的な存在なのだろうか。本論では、Jung 心理学における「影」の概念を援用しながら、Miriam の役割について考察し、なぜ物語の最後で Miriam が再登場するのか考えてみたい。再登場の理由を明らかにすることで、Miriam と Mrs. Miller の関係について新たな見方ができるのではないかと考える。

1

少女 Miriam について、Ihab Hassan は “a guilty image of her [Mrs. Miller’s] other self” (236) と述べ、Michael J. Larsen は “the double or *Doppelgänger*” (142) と述べるように、二人が分身の関係にあることはこれまでも指摘されてきた。それは次のような点を根拠としている。

まず第一に、例えば、Edgar Allan Poe の *William Wilson* (1839) をはじめ多

くの「分身小説」に見られるように、二人の名前が一致している点だ。Mrs. Miller と Miriam は映画館の前で出会う。名前を尋ねられた Miriam は “‘Miriam,’ she said, as though, in some curious way, it were information already familiar” (164) と答え、Mrs. Miller は “Why, isn’t that funny — my name’s Miriam, too” (164) と答える。この “information already familiar” という言葉が示すように、Mrs. Miller が名乗る前に二人が同名であることが Miriam によって示唆される。

次に、Daniel Keyes の *The Minds of Billy Milligan* (1981) の Billy のような多重人格者の症例が示すように、ある人格が別の人格の（あるいは互いの）思考を熟知していることだ。Mrs. Miller と Miriam にも同様な例が見られる。以下、その場面を見てみよう。

“How did you know where I lived?”

Miriam frowned. “That’s no question at all. What’s your name? What’s mine?” (166)

At precisely five the doorbell rang. Mrs. Miller *knew* who it was. The hem of her housecoat trailed as she crossed the floor. “Is that you?” she called.

“Naturally,” said Miriam, the word resounding shrilly from the hall. “Open this door.” (171, 強調 Capote)

“Wasn’t it nice of you to buy me the cherries . . .?” [. . .] “. . . and the roses and almond cakes? How really wonderfully generous. You know, these cherries are delicious. [. . .]” (171)

Mrs. Miller は無意識のうちに Miriam の好きなものを買ひ、逆に Miriam も

Mrs. Miller の名前や住んでいる場所などをあらかじめ知っている。“*knew*”、“*Naturally*” という語によって、互いが互いを「知っている」状態が示唆される。また、夜中の訪問時に Tommy という名のカナリヤが Miriam の存在にもかかわらず歌い出す点も、Tommy が Miriam を恐れておらず、二人の共通点を感じ取っていることを推察させる。

さらに、第三者には分身の姿が見えないというのも分身譚の特徴の一つである。物語終盤で、Mrs. Miller が助けを求めた男性が Mrs. Miller の部屋を確かめに行くが、“*Nobody there*” (173) という答えしか返ってこない。物語全体を通して、Miriam の姿は Mrs. Miller によってしか確認されていないのだ。

以上のように、名前が一致している、互いの存在を認識している、Mrs. Miller にしか見えていないという三点から、Miriam は Mrs. Miller の分身であると考えてよいだろう。

2

このように、“*Miriam*” を分身をテーマにした小説であると考えたとすると、C. G. Jung の「影」の概念が、少女 Miriam を理解する手がかりとなる。河合隼雄は Jung が元型の一つとして挙げる「影」について次のように説明する。

影の内容は、簡単にいって、その個人の意識によって生きられなかった反面、その個人が認容しがたいとしている心的内容であり、それは文字どおり、そのひとの暗い影の部分をなしている。(101)

Jung によれば、自分の生きられなかった反面が「影」として無意識下に抑圧され、それゆえ「本体」と「影」はしばしばその性格、行動において対照をなす。²

ここで簡単に二人の対照性をみておこう。Mrs. Miller は、関心の対象も狭く、友人もおらず、外出することもほとんど無い。平凡な服装で短髪、隣人か

らも気づかれぬ地味な女性だ。彼女の生活ぶりは“Her activities were seldom spontaneous” (163)とあり、物質主義華やかな時代、New Yorkという大都会においては、いわば禁欲的ともいえるものだ。一方 Miriam は、銀白色の長髪で、紫色のベルベットのコートを着て独特の気品をもった姿で現れる。物怖じすることなく Mrs. Miller にあれこれと要求する自己主張の強い女性である。また、“Give it to me” (168) とカメオを欲しがるように、物質主義的欲望の持ち主でもある。確かに、先に Hassan が指摘していたように Mrs. Miller にとって“guilty”と感じさせるイメージがともなう。しかし、美しいもの、美味しいものといった欲望の対象に対して“beautiful” (168)、“very nice” (168)、“lovely” (168) と自らの感情を素直に表現できる存在でもある。Mrs. Miller が欲望を抑えた禁欲的生を選択しているのに対し、Miriam は自分の欲望のままに生きる生を選んでいる。これらのことから、Miriam は Mrs. Miller とは対照的存在であることがわかる。Garson は Miriam について、“everything that she [Mrs. Miller] is not” (Garson 1980, 43) と述べているが、まさしく Miriam は「影」の定義を具現化する存在であるといえる。³

では、「影」である Miriam は Mrs. Miller に対しどのような役割をもっているのだろうか。ここで、「影」を自己を導くものとする Duane Schultz の論をみておきたい。⁴ 「成長心理学」の立場から人間性の健康な面に注目する Schultz は、Jung 心理学における健康な人格とは「われわれの人格にある無意識的な力との触れあいを回復させること」であり、「ユングの強調する人間らしさへの方法は、まさにユング自身のための方法、すなわち無意識との直面」(146) であるとして、次のように続ける。

ユングは、無意識による人格の支配あるいは統制を主張していたわけではない。それとはまったく逆である。彼が理想とした精神的健康とは、意識が無意識の力を方向づけ、導くという状態であった。意識の世界と無意識の世界は統合されなければならない。そして、どちらの面も自由に展開

していくことが許されねばならない、というものである。(146)

健康な人格の目標は、ペルソナを収縮させ、人格の他の側面を発達させることである。もちろん、およそ役割を演じるということは、すべて偽りなのである。健康な人間と健康でない人間の違いは、後者が他人だけでなく、自分自身をも欺いているという点である。健康な人間は、いつ自分が役割を演じているのかを知っており、同時に、自分自身の内面性を知っている。(156)

健康な人格においては、我々は相手に応じてペルソナを付け替え、他者の前で自己を演じている。しかし何らかのきっかけで、本来多様なはずのペルソナがある一つのペルソナに固定化し多様な自己を演じられなくなると、精神的な危機が生じる。Jung によれば、そのような状況下で意識を方向づけるもの、それが無意識の、すなわち「影」の力である。孤独な生活を続ける Mrs. Miller にはペルソナが入れ替わる機会がなく、自分が演じる役割についての自覚もない。知らず知らずのうちに彼女のペルソナは Miriam Miller ではなく、Mrs. H. T. Miller として固定化している。それは不健康な状態だと考えてよい。⁵

以下、「影」としての Miriam の役割について具体的に考えてみよう。そもそも分身の登場は Mrs. Miller の孤独な生活に起因する。外界と断絶することで、彼女を支えてくれるはずの他者の視線が不在になり、彼女のアイデンティティは不安定になっている。自己意識の希薄さこそ、分身を生み出す一番の要因となる。例えば、彼女は Mrs. H. T. Miller と名のっているが、それは H. T. Miller 夫人としての自己に執着するあまり、自分が Miriam Miller であるとの意識がないことを意味する。⁶ Garson が指摘するように “a person without an identity of her own” (Garson 1992, 9) といっている。しかし、Miriam の登場で、彼女は自己を意識するようになる。彼女が唯一、自分の名を意識するの

が、Miriam と出会ったときだ。初めて Miriam に出会った Mrs. Miller は奇妙に興奮した状態になるが、外界と断絶している彼女にこのような感情を与える存在が Miriam なのだ。Miriam には、Mrs. Miller 自身に自分の存在を問うような感情を起こさせ、自己の存在を確認させる役割があるといえる。

Miriam の第二の役割は、後に考察するが、Mrs. Miller の無意識の願望を表現することである。分身は本体の「影」を象徴するものとして描かれる場合が多い。⁷先に挙げたように、この小説では禁欲的な Mrs. Miller と自由奔放な Miriam が対照的に描かれている。Miriam の奔放さは、Mrs. Miller がなし得なかった活動的な生き方を表している。また、「影」には本体を導く役割があることを考えると、以下の場面は Miriam が何らの形で Mrs. Miller を導いているとも考えられる。それは、夢の中の少女という形で象徴的に現れている。

[A] small girl, wearing a bridal gown and a wreath of leaves, led a gray procession down a mountain path, and among them there was unusual silence till a woman at the rear asked, “Where is she taking us?” “No one knows,” said an old man marching in front. “But isn’t she pretty?” volunteered a third voice. “Isn’t she like a frost flower . . . so shining and white?” (169)

この白い少女は間違いなく Miriam であり、現実の中で方向性を失った Mrs. Miller を別の世界へ導くものとして描かれている。これは *Other Voices, Other Rooms* で、白い服で女装していた Randolph が Joel を手招きしていたイメージと重なる。ここで葬列のイメージが伴うのは、分身の創造が一方で自己の死も暗に含んでいるからだ。現在の自己の否定が分身を生み出すのである。⁸

実際、現実の世界でも Miriam は Mrs. Miller に働きかける。彼女との出会いの翌日から Mrs. Miller の行動が変化する。Larsen が “In the days following Miriam’s first visit, Mrs. Miller feels exhilarated [. . .] and, in general, strays

from the paths of thought and action that she has followed for years” (143) と述べるように、Miriam との出会いが彼女を過去の生活から別の方向、別の世界へ導いていく。

第三に、上と矛盾するようであるが、Miriam は、Mrs. Miller が死の恐怖を回避させるために創り出した、いわば希望だということだ。Miriam が分身であるなら、本来他の分身譚に見られるように、主人公と同じ似姿の分身であるはずだ。しかし、Mrs. Miller の分身は子どもの姿であった。それはなぜか。その理由として考えられるのは、未来を閉ざされた Mrs. Miller が、未来が開かれている子ども Miriam を創出することによって、精神的に死を先延ばしし、その恐怖を避けようとしたからである。もし Mrs. Miller が現状に満足しているのであれば、Miriam が登場する必然性はなく、そのまま平穏な日常を送ればいい。もし仮に彼女と同じ似姿であれば、それは死の予兆にしかならないだろう。分身 Miriam の登場は彼女の生存を脅かすかのように思われるが、一方で、彼女が無意識下ではけっして現状に満足していないことを逆説的に証明することになるのである。とすれば、Miriam を Mrs. Miller の生まれ変わりだと捉えることも可能だろう。

以上見てきたように、Miriam は、確かに Mrs. Miller に恐怖をもたらす存在ではあるものの、Mrs. Miller に自分の現状を認識させ、自分のもつ願望を明らかにさせ、死の恐怖を回避させるという必ずしも否定的な存在とは言い切れない面があることがわかる。

4

Miriam は、Mrs. Miller の自己の内部に存在する Miriam 的なものの否定によって生み出された。だが、Miriam の存在を怖れつつも、Mrs. Miller は彼女の登場を予期し、期待しているようでもある。では、Miriam の登場で Mrs. Miller はどのように変わっていくのか、みていこう。

Miriam が登場したとき、Mrs. Miller は自分が何者であるか、また自分が何

を望んでいるのかもわからない。Miriam が初めてアパートを訪ねてきた場面での “‘What do you want?’ [...] ‘What do you want?’ she repeated” (166) という Mrs. Miller の Miriam への、すなわち無意識への問いかけは、自分が何を欲しているのかわからないことを示している。また、以下の場面に見られるように、Mrs. Miller には自分が孤独であるという自覚さえない。

As she stood, striving to shape a sentence which would somehow save the brooch, it came to Mrs. Miller there was no one to whom she might turn; she was alone; a fact that had not been among her thoughts for a long time. Its sheer emphasis was stunning. But here in her own room in the hushed show-city were evidences she could not ignore or, she knew with startling clarity, resist. (168)

孤独こそが Miriam が登場する理由だが、当初から、彼女は Miriam を受け入れることに消極的である。“You know, I don’t think you’re glad I came” (166) という Miriam の発言の通り、Mrs. Miller は、Miriam を招かれざる客として応対している。

精神分析的には、「影」は「本体」にとって望ましいものではないため、「影」との対決は「本体」にとって大きな苦痛を伴う。Miriam が現れることで、Mrs. Miller が頭痛を起こしたり、夢にうなされたりするのは当然だ。しかし、Mrs. Miller は Miriam を完全に否定しているわけではない。なぜなら、彼女は Miriam が再び現れることを予期し、彼女を迎える準備をするために買い物へ出かけているからだ。だが、この時点でも “She had no idea what she wanted or needed, but she idled along, intent only upon the passers-by, brisk and preoccupied, who gave her a disturbing sense of separateness” (169) と、自分が欲するものを見つけたわけでも、孤独が解消されたわけでもない。それゆえ以下のように、彼女はなぜそのような行動をするのかという自覚がないまま、

無意識に支配され行動するのである。

“Six white ones, did you say?” asked the florist. “Yes,” she told him, “white roses.” From there she went to a glassware store and selected a vase, presumably a replacement for the one Miriam had broken, though the price was intolerable and the vase itself (she thought) grotesquely vulgar. But a series of unaccountable purchases had begun, as if by prearranged plan: a plan of which she had not the least knowledge or control. (170)

しかし、この行動は Miriam が彼女に取らせた行動である。例えば、バラや花瓶を買うのは、“She [Miriam] touched a paper rose in a vase on the coffee table. ‘Imitation,’ she commented wanly. ‘How sad. Aren’t imitations sad?’” (166) という Miriam が初めて部屋を訪れた場面と呼応する。この Miriam の指摘を受け、彼女は造花ではなく本物のバラを買う。一方、高価で趣味の悪い花瓶は、つましい生活をする Mrs. Miller が普段けって買うようなものではない。サクランボやアーモンドケーキも同様である。彼女の価値観とは違う価値観で行動させられているのである。“Imitation” という語は Mrs. Miller の生き方そのものが “Imitation” であることを示す。Miriam が花瓶を床にたたきつけるのも、本物の美を感じる力を失い造花で満足するほど感情を鈍化させ、自分の欲望とは反対の生活をする Mrs. Miller へのいらだちを示している。このようにみえてくると、Mrs. Miller の行動は、Miriam の願望、すなわち自らの無意識の願望を叶えるためのものであることがわかる。

無意識のうちに Miriam の願望に従う Mrs. Miller だが、再び Miriam が現れたときには、“It was not spell-like compulsion that Mrs. Miller felt, but rather a curious passivity; she brought in the box, Miriam the doll” (171) と、受動的ではあるが “curious” な状態で、すなわち “wanting to know about something” (*Longman Dictionary of Contemporary English*) という気持ちで、Miriam の

ことを知りたいと考え始めている。

Miriam との三度目の遭遇の場面で、一緒にアパートに住むのだとせまる Miriam に Mrs. Miller は、泣き始める。

Mrs. Miller's face dissolved into a mask of ugly red lines; she began to cry, and it was an unnatural, tearless sort of weeping, as though, not having wept for a long time, she had forgotten how. (172)

長い間、泣くことさえ忘れていた彼女は、悲しいという感情をようやく表に出せたのではないか。そして、これまで話しかけたこともない階下の住人に助けを求めるといふ自発的行動を起こす。こうして、欲望に対し素直な感情を表出する Miriam の存在が、Mrs. Miller に、自らが抑圧していた感情、抑圧していた行動を意識化させる。この一連の動きの中で、彼女は「影」と交流し始め、ここに「影」と「本体」の回路が開かれたことになる。

そして Mrs. Miller は以下の場面で、ついに自己が何者であるかに気がつく。

Suddenly, closing her eyes, she felt an upward surge, like a diver emerging from some deeper, greener depth. In times of terror or immense distress, there are moments when the mind waits, as though for a revelation, while a skein of calm is woven over thought; it is like a sleep, or a supernatural trance; and during this lull one is aware of a force of quiet reasoning: well, what if she had never really known a girl named Miriam? that she had been foolishly frightened on the street? In the end, like everything else, it was of no importance. For the only thing she had lost to Miriam was her identity, but now she knew she had found again the person who lived in this room, who cooked her own meals, who owned a canary, who was someone she could trust and believe in: Mrs. H. T. Miller. (173-

74)

ここに示されるように、Mrs. Miller は “revelation” を待っている。しかし、その間に理性が彼女に自分が何者であるかを認識させる。一度失われたアイデンティティを取り戻したと確信した Mrs. Miller が見出したもの、それは残念ながら、Miriam Miller ではなく、Mrs. H. T. Miller だった。Miriam との遭遇で、Mrs. Miller はそれまで考えることさえなかった自らの存在に意識を向けられるようになった。つまり、自身が孤独であること、自らのアイデンティティを失ってしまったことに気づくところまでは、Miriam によって導かれていった。しかし、まだ彼女は H. T. Miller 夫人、すなわち Mr. H. T. Miller の属性を強く帯びたままの存在であり、Miriam という自分のアイデンティティを取り戻せていない。

最後の場面で、“Listening in contentment, she became aware of a double sound: a bureau drawer opening and closing” (174) とタンスの引き出しを開け閉めする音が聞こえてくる。この引き出しの開け閉めは、彼女の内部にまだ明らかになっていないものが存在することを示している。Miriam は音を立てることで、Mrs. Miller にその存在を示しているのではないか。Mrs. H. T. Miller としての自分を取り戻したことに満足しつつも、その音を聞いている。もし、Mrs. Miller が破壊されるのだとしたら、そもそも彼女が Mrs. H. T. Miller だと認識する必要はない。自分が何者かわからなくなったとき、人は狂気へと誘われるからだ。だが、Mrs. Miller は自分が何者であるか自覚する。これまで失っていた「認識する主体」としての自分を自覚したのだ。引き出しの音は、「認識する主体」を取り戻した Mrs. Miller に、内在する Miriam を認識するよう促す音なのだ。そして、再び、Miriam が登場するのである。

結 論

以上見てきたように、「影」としての Miriam は、Mrs. Miller に自覚を促す役割を担っていた。ペルソナが固着していた Mrs. Miller は、Miriam との遭遇によって、徐々に自分が何者であるかに気づき始めた。Miriam が求めているものは、Mrs. H. T. Miller としてではなく、Miriam Miller としてのアイデンティティである。それは、彼女に内在する欲望の存在に気づかせることであった。先に Schultz が指摘していたように、「自分自身をも欺いている」状態ではなく、「自分自身の内面を知っている」(156) ことが望ましいのだと考えれば、Mrs. H. T. Miller としての自己認識を捨てきれないとき、再び Miriam が登場するのは、彼女を破壊するためではない。今一度、Mrs. Miller に Miriam というアイデンティティを、自己の内面を自覚するよう促すためなのである。このように考えると、「影」としての Miriam の存在を肯定的に捉えることも可能ではないかと考える。

注

- 1 Robert L. Gale は *Truman Capote Encyclopedia* (Jefferson: McFarland & Company, Inc., Publishers, 2010) の中で “a little girl, also named Miriam [...] enters her [Mrs. Miller’s] life and, doppelgänger that she is, destroys the woman’s separate identity” (160) と述べ、やはり Mrs. Miller の破壊を示唆している。
- 2 河合は「そのひとの暗い影の部分」としているが、本文に示した Duane Schultz の考え方からすれば必ずしも「影」を否定的に捉える必要はないだろう。
- 3 今井夏彦も Miriam を「影」としているが、「やむにやまれずミリアムという幻想をつくりだしてしまったミラー夫人であるが、ついにはその幻想が現実をおおいつくしてしまい、区別がつかなくなる。そこには『再生』の道は見出しにくい」(285) として、Mrs. Miller の再生の可能性を否定

している。（「Miriam 試論 — 死の天使」『英米文学研究』14号 梅光女学院大学英米文学会 1978参照。）

- 井土康仁は Sigmund Freud の「快感原則」を用いた議論で、次のように述べ、Miriam を導き手としている。

Freud によれば、心には「快感原則」に則る部分と、「快感原則の彼岸」へ向わせる欲動が潜んでいる。その欲動は、彼女を再び「彼岸」へと連れ出すことになるだろう。その導き手となるのは、勿論 Miriam 以外に有り得ない。だからこそ、Miriam は再び、Mrs. Miller の前に “Hello” と言いながら現れるのだ。（36, 「カポーティ、移動する — フィクションとノンフィクションの間で」『Language & Literature (Japan)』19 愛知淑徳大学大学院英文学研究室 2010）

- 「影」との関係が否定的になった場合どうなるのか。Hans Christian Andersen の『影法師』（1847）を題材に分析した梅内幸信は、「他人が心の中で秘かに思っていることを自由自在に読み取れるという影法師は、明らかにユングの言うところのシャドウに当たっている。このシャドウが一つの人格をもって自律するということは、まさに学者が自己の無意識を無視して、影の存在を徹底的に抑圧していたということを示している」（339-40）と述べているが、このように自律した影は、やがて本体を破滅させることになる。（梅内幸信『悪魔の霊液 — 文学に見られる自己の分裂と統合』同学社 1997年参照。）
- 大野一之は、“Miriam” というタイトルについて、Capote は「〈ミリアム・ミラー〉という一人の人物のアイデンティティの異質な部分を〈ミラー〉と〈ミリアム〉にそれぞれ表徴させ、〈ミリアム〉の話を〈ミラー〉の観点から語ろうとした」（79）と述べ、Miriam と Miller という名の対比を指摘している。（「ミセス・ミラーの覚めることのない悪夢：分身小説と

しての『ミリアム』『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』vol.8 愛媛大学法文学部 2000参照。))

- 7 文学における「分身」、「影」については、オットー・ランク『分身 ドッペルゲンガー』(有内嘉宏訳 人文書院 1988年)、同『おとぎ話における影』(氏原寛訳 人文書院 1981年)、河合隼雄『影の現象学』(講談社学術文庫 1987年)、*Fearful Symmetry: Doubles and Doubling in Literature and Film* (Ed. Eugene J. Crook, Tallahassee: UP of Florida, 1981) に詳しい。
- 8 Garson はこの場面を、“‘procession’ away from, not toward, a mountain top; traditionally mountain tops represent wisdom, achievement, and understanding, but these people clearly are not being led in that positive direction” (Garson 1992, 11) と解釈しているが、Miriamが無意識の欲望を示す存在であるとするれば、Garsonのいういわばロゴス(理性)的価値観ではなく、“down”という語が示すように無意識下のパトス(感情)的価値観の方向へ、つまり無意識の欲望を気づかせる方向へと Mrs. Millerを導いていると考えられないだろうか。

また、Mrs. Millerはこの場面に出てくる老人と翌日通りで出会うが、後に Miriam との同居が示唆されるが、Mrs. Millerの性的抑圧を表しているといえるかもしれない。

引用文献

- Capote, Truman. “Miriam.” *The Grass Harp and A Tree of Night and Other Stories*. New York: Signet Book, 1980.
- Garson, Helen S. *Truman Capote*. New York: Fredrick Ungar Publishing Co., 1980.
- , *Truman Capote—A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne Publishers, 1992.
- Hassan, Ihab. *Radical Innocence* Princeton: Princeton UP, 1961.

Larsen, Michael J. “Capote’s ‘Miriam’ and the Literature of the Double.”
Truman Capote—A Study of the Short Fiction. New York: Twayne
Publishers, 1992.

Longman Dictionary of Contemporary English Fifth Ed. DVD-ROM Ed.
Pearson, 2009.

Shultz, Duane. *Growth Psychology—Models of the Healthy Personality*.
New York: Van Nostrand Reinhold Company, 1977. (『健康な人格 — 人間の
可能性と七つのモデル』上田吉一監訳 川島書店 1982年)

河合隼雄『ユング心理学入門』培風館 1967年

A Study of “Miriam” — Miriam’s Role As a “Shadow”

Osamu Yamaguchi

Miriam in Truman Capote’s “Miriam” is a girl who is a Doppelgänger of Mrs. H. T. Miller. Most critics point out that Mrs. Miller creates her double, Miriam, and eventually, Miriam destroys Mrs. Miller’s identity. It is certain that Miriam is Mrs. Miller’s alter ego, but is it true that Miriam affects Mrs. Miller negatively? This paper aims to examine Miriam’s positive effect on Mrs. Miller and why she reappears, saying hello, at the last scene of the story.

In Jungian psychology, “shadow” is an unconscious aspect of the personality which the conscious ego does not want to be. In other words, “shadow” is an undesirable aspect of the conscious self. As Duane Schultz says, Jung argues that the unconscious aspects and the conscious self should keep balance within the healthy personality. In this sense, “shadow” plays an important role in guiding the conscious ego toward a desirable personality.

Mrs. Miller, an isolated old woman, lives a secluded and passive life. She identifies herself as Mrs. H. T. Miller. Miriam, who is the “shadow” of Mrs. Miller, appears to make Mrs. Miller live actively and realize that she is not Mrs. H. T. Miller but Miriam Miller. The encounters of Miriam and Mrs. Miller gradually make Mrs. Miller act positively, begin to understand who she is, and find herself an isolated, lonely woman who doesn’t have anyone she relies on, who still thinks that she is Mrs. H. T. Miller, not Miriam Miller. As a result of that, Miriam, the “shadow,” as the guide of the conscious self, reappears to make

her realize that she is Miriam. In this sense, Miriam seems to play a positive role in the story.